



TITLE:

資本主義を超ゆるもの

AUTHOR(S):

柴田, 敬

CITATION:

柴田, 敬. 資本主義を超ゆるもの. 経済論叢 1941, 53(4): 377-391

ISSUE DATE:

1941-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/131604>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷三十五第

月十年六十和昭

論叢

日本銀行を中核とする金融機關の組織體……

經濟學博士 小島昌太郎

資本主義を越ゆるもの……

經濟學博士 柴田敬

イギリス海運政策史上のアメリカ……

經濟學士 佐波宣平

個人主義經濟倫理の批判……

經濟學士 白杉庄一郎

ナチス經濟團體とカルテル……

經濟學士 靜田均

研究

石門心學に於ける經濟思想……

經濟學士 竹中靖一

經濟社會の構造分析……

經濟學士 北野熊喜男

說苑

ロバートソンの價格水準理論の批判……

經濟學士 青山秀夫

陳翰笙著「産業資本と支那農民」……

經濟學士 鈴木總一郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

資本主義を超越するもの

柴田 敬

一 序 論

戦局の推移は、今日の世界大戦が、武力的に如何に眼覚しい大捷利をかち得やうとも、それだけによつて窮局の捷利が得られる様な戦争ではなく、政治力、経済力、社会力、文化力と言ふ様な點に於ても充分に秀れたものでなければ捷ち抜く事の出来ない戦争であると言ふことを、愈々切實に深刻に感ぜしめるやうになつて來た。惟ふに今次の世界大戦は世界史の轉換過程に於ける陣痛である。従つて世界史の審判に堪え得る新しき世界原理に立脚して單に武力のみならず経済力も社会力も文化力も躍動せしめ得る様な、單に自國の力を動員し得るのみならず敵國をも自ら靡かせ得る様な、戦争指導を爲すのでなければ窮局の捷利は覺束ない。我々が新しき時代の經濟原理を究明するのは決して單なる學究の閑仕事であつてはならないのである。

戦争の壓迫が加はつて來るにつれてその場の場のやりくり算段に没頭して基礎的研究を忽にする様な風潮が往々にして起つて來るのであるが、その様な事に没頭して其の口暮しをしてゐるやうでは世界的規模に於て長期的總力的體系的に戦はれてゐる今日の戦争に捷ち抜く事は覺束ない。一時の遺練によつて局部的戦闘を有利に導く事があり得るとしても結局はその捷利も亦水泡に歸する危險なしとしない。従つて我々は此の世界的戦局の表

面的事象に心を奪はれてしまふ事なく、その奥に在るところのものへ飽く迄原理的に考究を進め、戰略を新しき世界原理に基礎付けられたるヨリ高次のヨリ體系的なるものたらしめる事を怠つてはならないのである。

今日の世界史の轉換過程はこれを經濟學的にみれば資本主義的經濟秩序より共同的全體主義的經濟秩序への轉換過程である。此の轉換過程は、恰も封建的經濟秩序より資本主義的經濟秩序へのそれが多くの苦難を伴つてゐた様に、それにもまして深刻なる陣痛を現に今日伴つてゐるのである。此の生みの悩みの苦痛の中で資本主義的經濟秩序は或は徐々に或は急激に變化しつゝある。數年前迄は専門的研究者だけが、いなそのうちの極く少數の進歩的な人々だけが、無智な世間や阿世的なる學者達の批難と闘ひ乍ら唱道してゐた様な強度の經濟統制が今日では殆んど何等の反對もなしに累積されて行きつゝある。

斯くの如き變化の中に新しき時代は僅の見えてゐる。新しき世界原理は斯くの如き苦惱の中に生じつゝある諸々の變化の中から讀みとられねばならない。經濟の統制化乃至計畫化はたしかに新しき時代の原理の姿を宿し、それを豫告しつゝあるのである。けれども、だからと言つて經濟の統制化乃至計畫化は總て新時代的であると考へるならば、それは速斷に失するものと言はなければならない。

資本主義的經濟秩序は或意味に於て統制的乃至計畫的な封建的經濟秩序を乗超えて發展したものである。今日は、一方に於て減びゆく資本主義的經濟秩序に病的に執着せる反動思想があるのに對抗して、唯一途に資本主義を誹謗し統制主義計畫主義を強調する風潮すらあるのであるが、資本主義は、或意味に於ては統制主義計畫主義よりもヨリ進歩的なものとしてその歴史的存在理由を持つたのである。だから、資本主義以上のものとしての計畫主義こそが新時代的なものでなければならぬ。さうであるならば、世界史的轉換過程に於て起りつゝある

諸々の變化の中に新しき世界原理を讀取り得んが爲には、我々は、資本主義は如何なる意味に於て進歩的であつたか、如何なる意味に於て限界を持つものであつたかを究め、資本主義よりもヨリ進歩的なるものが如何なるものであるかを究めなければならぬのである。

從來資本主義の限界性を問題にする場合に、その觀點は兎角分配論の分野に局限されがちであつた。然し、來るべきものは分配論の面に於いて資本主義に優越するといふだけでは足らぬのであつて、生産論の面に於いてもさうであらねばならぬ。現に新しき世界秩序の生成過程は世界大戰といふ生命懸けの苦惱の過程である。此の苦惱に堪えてゆく爲には、勿論社會的不安を内藏すると云ふが如きものであつてはならないのであるが、然し社會的不安を持たないと云ふだけでは足らないのであつて、生産力戰に於ても飽くまで優越しなければならぬのである。である以上は生産論の面に於て資本主義に一步を譲ると言ふが如きものであつてはならないのである。従つて我々は殊に生産論の面に於て資本主義の進歩性を乗超える様な新原理を發見して掛らねばならぬのである。

二 資本主義の進歩性

資本主義經濟とは資本主義的組織を持ち資本主義的に運営せられるところの經濟である。經濟即ち社會の物的基礎の再生産は社會構成員が相互に何等かの常規的關係に立つてそれに參與する事によつてこれを行ふのであるが、此の常規的關係の體系乃至その下に於ける社會構成員の參與によるその運営が資本主義的であるとき、我々はその經濟を資本主義經濟と呼ぶのである。

元來經濟の組織乃至運営が資本主義的であると言はれる爲には、その經濟が問題にされるところの其の團體

の經濟上の部分組織體たる企業が資本家乃至その代理者によつて勞働者を驅使しつゝ利潤の獲得を指導原理として運営せられ、斯くの如き部分組織體の活動の自然的結果として全團體の經濟の運営が行はれるのでなければならぬ。従つて經濟組織乃至運営が資本主義的であると云ひ得られる爲には社會構成員相互乃至部分組織體相互が間接的交換關係に立つて經濟の運営に參與するのでなければならぬし、その經濟が問題にされるところの其の團體の經濟上の部分組織體の構成員が資本家及び勞働者としての特殊の關係に立つてその運営に參與するものでなければならぬ。

經濟の運営は社會構成員の間の廣義の分勞と分益とによつて行はれるのであり、廣義の分勞は單純協業と分業的協業とよりなるものであるが、協業殊に分業的協業は生産力發展の根本原因を爲すのである。蓋し、分業的協業は、個々人にては全然不可能なる大規模の生産を可能にし、比較的適材を比較的適所に用ふる事を可能にし、勞務を専門化しそれによつて熟練を増加せしめ、技術の交流を促す事によつて技術の一般的進歩を扶け、勞務を單純化することによつて勞務修得に要する時間及び費用を節約せしめ、勞務を單純化し専門化する事によつて勞働手段を或る意味に於て單純化し専門化し、それによつて勞働手段殊に機械の發明利用を促進し、更に、一つの仕事より他の仕事へ移るに際して失はれるところの時間を節約せしめる等々の理由によつて生産力を増加せしめるものであるから。此の事は一應は單一生産場内の分業的協業に就て言はれ得る事であるが、最後の點を除けば生産場相互の分業に就てもそのまゝ言ひ得られるのである。

右に述べられたる分業の生産力増加作用は直接には分業そのことに附屬してゐるのであり特殊の分業形態に屬する事ではないのである。即ち凡そ如何なる形態の分業であらうと分業が行はれる限り、右の作用が働くのであ

る。而して右の分業の生産力増加作用は分業の規模が大であればある程大である。けれども分業は技術的社會的にその規模を規定されてゐるのであつて如何なる規模の分業でも勝手に行はれ得ると云ふわけのものではない。然るに交換の形態殊に間接交換の形態の分業は分業的協業を統一する爲の統一的權力の及ばざる範圍に迄達し得るのであり、それによつて社會的分業（有意的組織體相互間の分業）の範圍を擴大し得るのである。而も斯くの如き社會的分業の規模の擴大は更に狹義の分業（有意的組織體内の分業）の規模をも擴大するのであり、それによつて右に述べられたる分業の生産力増加作用をヨリよく發動せしめ得る事になるのである。然るに資本主義的經濟組織乃至運營は間接交換の形態の社會的分業によるものであり、正にその故に各國の政治的支配力の及ぶ範圍を超えて世界的規模の分業體系を成立せしめたのである。此の點に資本主義の生産力増加作用の原因の一つがあつたことは否み得ないのである。

間接交換の形態の分業の下に於ては社會構成員は、經濟運營上何等の任をも果し得ざる場合には死の宣告を與へられ、その任務を他の候補者よりも秀れて盡し得ざる場合には容赦なく免黜され、如何なる任務でも他の候補者よりヨリよく盡し得るならばそれに就く事が出来るのである。従つて、社會構成員は死の宣告を免れむが爲には經濟運營上何等かの任務を分擔しなければならぬのであり、免黜を免れむが爲には擔當せる任務を他の候補者に負けぬ様に盡さねばならないのであり、又、他のヨリ望ましき任務に就き得んが爲には益々有力なる候補者と競争し、それよりもヨリ秀れてその任務を盡し得る所以を實證しなければならぬのである。従つて、社會構成員は經濟の運營を分擔してゐると言ふ自覺を持たないでも、即ち社會的自覺はなくとも、苟しくも生きんと欲し、又ヨリよく生きんと欲するならば、即ち手近な利己心から、經濟運營上の何等かの任務を分擔し全力を擧げ

てその任を盡し社會に奉仕しなければならないのであり、喜んで積極的にさうするのであり、奉仕してやると言ふのではなく奉仕させて貰ふと云ふ氣持で率先的に奉仕するのである。即ち此の分業形態は、その利己心の關する限り社會構成員の全能力を動員し内心から奉仕せしめる様にするのである。此のことは、今日統制の強化につれこれまで慇懃に全力を盡して仕事をさせて貰つてゐた人々が澁々と横柄にサボリ氣味に仕事をしてやる態度に急變しつゝある現狀にこれを照して見る時に、誠に歴然たるものがあるのである。

間接交換的分業形態の下に於ては價格が社會構成員の經濟運営上の分擔任務遂行上の努力目標の基準となるのであるが、此の事は社會構成員の經濟運営上の分擔任務遂行上の努力目標を極めて明確にしてゐるのである。而してそれが價格の不斷の動搖によつて或程度その明確さを妨げられる場合に於ても社會構成員は經濟運営上分擔せる自らの任務の關する限り最も眞剣に、従つて恐らくは他の如何なる人よりもヨリ秀れて其の目標を見分けるのである。従つて目標の不明確さによつて迷はされるが如きことなく、社會構成員は目標を見つめて勇敢に努力し得るのである。此の點は、今日とかく捉へ所のない標語が次から次へ投げかけられ、又自らの決定せざる規則、殊に極めて複雑なるそれが外部的に強制される事によつて經濟運営擔當者がその努力の目標を往々にして見失ひ氣味である事に顧みるとき、今更乍ら知らされる事である。

交換的分業の下に於ては經濟運営上の分擔資格を夫々の社會構成員が持つや否やの判定が超人爲的に且つ飽く迄冷やかに徹底的に行はれるのである。従つて行掛りや、傳統や、情實や、感情やによつて歪められる事がないのであり、従つて斯くの如きものによつてそれが歪められてゐると思ひ悩む必要もないのであり、社會構成員は超人爲的な決定に甘んじて服するのである。従つて適材を適所に就けると云ふ事が極めて機械的に徹底的に行

はれ得るのである。

交換的分業の下に於ては交換的に爲される分勞に照應して交換的に分益が許されるのであり、分益の享受は地位とか體面とか傳統とかに妨げられないのである。従つて人の慾望が開放され、一方では斯くの如く開放されたところの慾望を満足せんが爲に、従つてその慾望を満たすところのものを交換的に替取り得るところの手段たるべきものを獲得せんが爲にその生産に努力する様になり、他方では斯くの如くして慾望が開放され需要が増加するにつれてその需要に應ずる爲の生産が起つて来る。

分業の協業は分擔者の勞務が相互に協業し得る如く綜合されるを要するのであるが此の綜合は交換的分業形態の下に於ては、それを意識的に行ふところの機關及びその活動に俟つ事なく、謂はゞ自然現象的に行はれるのである。従つてそれがそれとして意識的に行はるべきであるとするならば避けられないであらう形大なる機關及びその活動従つてその爲の勞費から、交換的形態の分業は免れてゐるのである。

間接交換的分業形態は資本主義的分業形態の下に於て始めて一般化し得るのであり、且、間接交換的形態の分業なしには資本主義的分業形態の分業は在り得ないのである。此の意味に於て間接交換的分業形態の生産力増加作用は資本主義的分業形態に歸屬すると言ひ得るのであるが、だからと云つて間接交換的分業形態が其まゝ資本主義的分業形態である譯ではない。資本主義的分業たり得る爲には、單に間接交換的分業たるだけでなく更に、經濟上の部分組織體たる企業が資本家及び勞働者と云ふ特殊の構成員によつて特殊の關係に於て組織され資本家乃至その代理者によつて利潤の獲得を指導原理として運營される事によつて行はれる社會的分業でなければならぬ。資本主義的分業の生産力増加作用はそれが間接交換的分業であると言ふ點に存するだけでなく、正に右の如き特

に資本主義的な形態のそれであると言ふ點にも存する。即ち資本主義的分業形態の下に於ては經濟の運営は多數の部分組織體の自由なる活動に委ねられ全體的には無政府的に行はれるのであり、夫等の部分組織體は資本家乃至其の代理者の手に委ねられてゐるのであり、利潤を最大ならしむるが如き仕方にて運営されさへするならば白らの地位を保持し發展せしめる事が出来るのである。従つて資本さへあるならば斯くの如き部分組織の運営者乃至その支配者となつて自由に資本の利殖を行ふ事が出来るのである。従つて生存基本——其の資本主義的現象形態が資本である——の蓄積は自ら刺戟され、それによつて大規模なる生産施設の設備及び利用が行はれる事になるのである。更に、利潤を増加せしめる方法の重要な一つは生産費の切下げに在るのであり、その生産費切下げの方法の重要な一つは技術の進歩に在るのである。従つて、利潤を最大ならしむるが如き仕方にて運営されるのでなければその企業を保持し發展せしめ得ない様な關係の下に於て部分組織體が運営せられるのである以上、一方では生産技術の不斷の研究が、他方では有利なる新生産技術を實行に移す爲に必要な諸施設の不斷の擴張従つてその爲の生存基本の不斷の蓄積が生ずる。のみならず、それが大なる利潤を齎すが如き仕方にて運営されてゐるならば、部分組織體は單にそれによつてヨリ多くの蓄積資源を持ちヨリ多くの生存基本蓄積を爲し得るに止らず、更に有利なる利殖先を求めつゝある他の資本をも吸収し得るのであり、それによつてヨリ有利なる生産技術の採用の爲の生産施設の設備乃至擴張が可能にされるのである。斯の如くして資本主義的分業形態の下に於ては有利なる生産技術の研究と採用とが特殊の拍車をかけられる事になるのであるが、更にその上に資本主義的分業形態の下に於ては正に部分組織體が資本家乃至その代理者によつて利潤追及を指導原理として自由にて運営せられるものであるが故に、従つて利潤追及の觀點より見て勞働者の代りに新しき機械を用ひる方がヨ

リ有利なる場合には容赦なく勞働者の排除が爲されるのである。従つて、勞働者は常に新しき機械と競争的なる地位に置かれその競争者によつて不斷にヨリ強度の勞働へ驅り立てられてゐるのである。此の點に於ても正に資本主義的なる分業形態は生産力を昂めるものとして作用してゐるのである。

最後に資本主義的分業形態の下に於ては中世期的徒食者階級が排除され大部分生産階級化されるのであるが、此の事も亦資本主義的分業形態の生産性を昂めた事情の一つと考へる事が出来る。

三 資本主義を超ゆるもの

資本主義を超ゆるものを瞭かにする爲には右に於て考察されたる如き資本主義的分業の進歩性に必然的に伴ふところの限界性を瞭かにすると共に、それが如何にして超え得らるべきものであるかを究明しなければならぬ。

資本主義的分業形態は社會的分業體系を世界大に擴大しそれによつて生産力の増加を齎したのであるが、やがて資本主義の獨占化につれて世界を幾つかのブロックに寸斷してしまつた。新しき時代は此のブロック化の過程の中から徐々に生れ出でねばならぬのであるが、それが資本主義を乗り越えたものであり得る爲には、分業體系の斯かる寸斷の危險性を除去するものでなければならぬし、其の爲には、分業體系の持續性を保障し得る原理に立脚するものでなければならぬ。即ち、弱肉強食的私的競争原理によるものでなく、弱者強庇的共同體的競争原理とも呼ばるべきものによるものであらねばならぬ。此の點に就ては尙ほ詳論を要するのであるが、他の機會に譲る事にする。

次に、資本主義的なる形態の分業の下に於ては曩に述べたやうに社會構成員は、社會的自覺からではなく、手

近かな利己心から喜んで積極的に經濟運営上の任務を分擔しその任を盡すのであり、此の點に於て資本主義的營業形態は最も進歩的なものとして現れたのである。然し乍ら元來人間は決して利己心だけによつて導かれてゐるものではなく己よりもヨリ大なるものの中に包攝されて生きてゐるのであり、それを自覺する時に人間は己一個の立場に在るときに持ち得ざる感激を持ち、己一個の立場に在るときに發揮し得ざる力を發揮し得る様になるものである。然るに此の人間の力が資本主義的分業形態の下に於ては非常に歪められた形に於てしか動員され得ないのである。殊に資本主義の下に於て分業的協業が愈々人間の生活の全面に行きわたる様になり、分業的協業による經濟全體の運営に人間の生活が依存する程度が愈々強くなつてゆくにつれて社會的自覺が次第に昂まり部分的なるものの爲に奉仕せしめられる事を潔よしとしない様な主張が普及して來ると、資本の利益を指導原理として行はれる様な企業運営は勞務者の心からの共鳴を呼び得ない様になるのであり、又、資本主義の下に於て技術が進歩し技術の精密度が飛躍的に増して來るにつれて生産過程は情熱を込めた注意力を必要とするのであるが、斯くの如き注意力は資本の利益の爲に奉仕せしめられて居る様な感じがある限りとても望み得ないのである。殊に資本主義の變質につれて益々計畫的な經濟運営が必要になつて來るのであるが此の場合には部分部分が單にその個別的な立場に捉はれて行動する場合には結局全體的な混亂を結果するのである、従つて、社會的自覺に立つた行動が益々要望される様になるのである。斯くの如き行動はこれを資本主義的分業形態に期待する事は出来ない。蓋し、それは利己心に關する限りに於て社會構成員の能力を動員し得てゐるのに過ぎないのであつて、社會的自覺の關する限りに於ては決してさうではないのであるから。茲に資本主義の進歩性の限界がある。漸しき原理は、此の限界を超え、感激を以て全體の爲に働く人間の社會的自覺にも訴へ得るものでなければなら

ぬ、即ちそれは社會の爲に盡す事によつて社會によつて生かされる所以を明確にせるものでなければならぬ。若し資本主義の後に來るものが、たゞひたすらに全體への奉仕を強要するだけで、全體への奉仕によつて個が個への奉仕に終始してゐるよりもヨリ良くヨリ感激を以て生かされ得る所以を實證し得ない様なものであるならば、それは資本主義を乗り越ゆるものではあり得ない。

交換的分業の下に於ては價格が支配するので經濟運営上の目標は如何にも明確であり、其の目標に従つて任務を遂行する事は或る場合には如何にも生産性を昂める事になるのであるが、價格を基準とする目標は價格の動搖常なき事の故に必ずしも充分に明確であるとは言ひ難いのであり、假りに此の點を措くとしても價格を基準とする目標に従つて行動する事は必ずしも生産力の増加を伴はないのである。此の後の點は今一步説明を要する。即ち先づ第一にこれを需要の面から見るとすれば價格的に現れて來るところの需要は必ずしも健全なるものとは限らない、蓋し、それには需要者の無自覺的不節制に基くものもあらうし、生産者によつて故意に觸發されたるものもあらうから。他方ではこれを供給の面から見ると價格を基準にして決定されたる目標に従つて供給を決定すると云ふ事になれば、最大の利潤の得られる程度に供給を制限せねばならぬ事もあり得る。供給量の人爲的制限は特殊の事情のある場合の外は之を禁止すべきであり、さうする限りに於て資本主義的分業形態は神の意思に叶つて生産性を昂める様になる、と論ぜられたのであり、且資本主義の發展期に於ては供給量を人爲的に差控へる事によつて利潤を増加せしめると言ふが如き餘地は少かつたのであるが、資本主義が獨占段階に入つてからは供給量の人爲的制限は必然的一般的現象となつて來たのである(此の點に就ては拙著「資本主義經濟理論」に譲る)。従つて價格を基準として決定されたる目標に導かれて行動する事は健全なる方向へ生産力を向けしめる所以でも生産性を昂

めしめる所以でも益々ない様になる。茲に資本主義的の進歩性の限界がある。此の限界を乗超えんが爲には、一方に於ては停止價格制を採りつゝそれに含まれる不合理性を取除く手段を講じ（此點は拙著「日本經濟革新案大綱」に譲る）、他方では生産及消費を國民經濟計畫に依存せしめ、安いから何程でも買ふ、儲かるから何程でも生産すると云ふが如き事の行はれない様にしなければならぬ、換言すれば生産及消費の規定者としての地位から價格を引落さなければならぬ。

交換的分業形態の下に於ける業務分擔者の資格の判定は、如何にも恣意、傳統、情實其他からよほど解放されてゐるのであるが、恰も上述の如く分擔任務の遂行上の目標が必ずしも合理的なものでない以上、その判定の基準となるところのもの自體が常に合理的なるものであるとは限らぬのである。従つて資本主義の此點に於ける進歩性は特に取立てゝ數へる程の重要性を持つとは考へられないのであるが、それにしても經濟が計畫的に行はれるやうになれば指導者の選定も自ら意識的に行はねばならぬ様になるのであるから、その選定に際し單なる權力的強制、情實、感情等の混入の餘地がそれだけ多いのである。従つてその決定は飽く迄共同的全體主義的自覺に基き適材を適所に置くことその事を喜びとするが如き仕方に行はねばならない。

交換的分業の下に於ては如何にも慾望が開放され、それによつて生産が刺戟されるのであるが、一方からすれば斯くの如くして開放される慾望は必ずしも健全なるものとは限らないのであり、即つて人の心身を墮落せしめ生産力そのものをも低下せしめる様になる事もあり得るのであり、他方からすれば生産の刺戟は決して慾望の自由奔放なる開放なしには行はれないものではないのである。資本主義の次に來たるものは國民經濟力の全面に互る共同的全體主義的、合理的配分を考へ國民經濟力によつて國民の生命が最もよく生かされ、それによつて國民

經濟力そのものが又最もよく延ばされ得る様に計畫的に運營されねばならぬのである。

資本主義的分業形態の下に於ては技術の進歩が至上命令となるのであり、それによつて技術の躍進を見たのであるが、而も技術はそれが發達すればする程益々大規模の研究を要し、又、各部分に於ける研究の綜合を要する様になるのに、資本主義的分業形態の下に於ては技術の研究の規模も自ら部分組織體たる企業の規模に依つて限定されざるを得ないのであり、従つて利潤の獲得と比較的密接なる關聯を有する限度に於てしか研究が行はれないのであり、殊に企業の利潤追及目的上要求されることの祕密保存の必要上技術の公開従つて大規模の綜合が妨げられざるを得ないのである。のみならず學問的研究の自由も亦間接交換的に奪取らるべきものとなつてゐる爲に、資力あるものゝ子弟でなければ研究生活に没入すると云ふが如き事は望めない。従つて、國民團體の有する智能は完全には活用され難くなつてゐるのである。その上資本主義が獨占化するにつれて新しい技術が往々にして握り潰されその用を爲さなくされる様な事が起るのである。茲に資本主義の限界がある。従つて資本主義を乗り越えて來るところのものは資本主義的企業の支配下ではとても出來ない程の大研究機關を持ち各分野に於ける研究を綜合し、資産の有無に拘泥するが如き事なく人材を廣く天下に求め、精魂を盡して喜んで研究に没頭出来る如き環境に於いて研究に當らしめるものでなければならぬ。

資本主義的分業形態の下に於ては如何にも生存基本の蓄積が至上命令となるのであるが資本主義によつて與へられるその蓄積の刺激には限界があるのである。即ち資本主義の下に於ける蓄積は、一方では正に利潤の獲得を目指すものであるが故に利潤獲得の見込の充分ならざる場合にはその停滯を見るのであり、特に此の點は資本主義の獨占化につれて利潤獲得の見込が少くなるにつれて甚だしくなるのであり、他方では資本主義の下に於ける

經濟の衝動力であるところの利潤が正に資本主義的に自由に處分され得ることを前提せるものであるが故に、至上命令的蓄積と相並んで常に恣意的浪費が伴はざるを得ないのである。茲に資本主義的分業形態の限界がある。資本主義を乗超ゆるものは、一方では生存基本の蓄積を直接に國民團體の必要に結び付け見込利潤による制限から之を開放するものでなければならぬし、他方では不節制なる個々人の浪費を規制し、經濟運営を時間的空間的に全面的に計畫し、社會的自覺に訴へて必要なる蓄積を行ふものでなければならぬ。

資本主義的分業形態の下に於ては必要なる生存基本が蓄積によつて得られるのみならず、色々な投資形式による集中によつても獲得され得るのである。けれども此の點に於てもその集中はそれが資本主義的に行はれる場合にはその集中過程そのもの、中に於て利潤追及が策される爲に、一方では、既得權益に立籠る掛引乃至抵抗が存し、他方では、不安に基く遲疑を伴ふのである。此の點に於ける資本主義の限界は、一方では所謂既得權益に執着する餘地なからしむる程に社會的自覺を昂めると共に、生存基本の利用の移讓者に對して適當なる褒賞乃至報酬を保障する如き體制を執る事によつて之を乗超えるべきものである。

分業的協業の下に於ては分擔者の勞務は相互に生かし合ひ得るが如きものへ綜合されねばならぬのであるが、此の綜合は如何にも一應は交換的分業形態の下に於てはそれを意識的に行ふ機關及びその活動に俟つ事なく謂はゞ自然現象的に行はれるのである。けれども斯くの如き機關が全然存在しないかと言ふに決してさうではない。金融機關にしても配給機關にしても要するに斯くの如き機關に過ぎないのであつて、たゞそれが斯くの如き機關としての自覺を以て動く事なく、又、全體的に計畫的に動く事なく無政府的な社會自然力の統制の下に活動してゐると云ふに過ぎないのである。而して正に斯くの如き仕方にて活動せるものであるが故に非常に多くの無駄

のある活動をしてゐるものである。流通に關する企業の数が不當に多數である事、それらが相互に競争する爲に不當に多くの流通費(例へば廣告費、外交員費、見せかけの巨大な店舖の爲の費用等)を要する事、それらが無政府的に活動せるが故に例へば不當に多くの手持品を擁し不當に屢々商品の移動を爲し交通力を浪費すると共に商品を損傷しつゝある事、物資不足の場合に値上り見込より手持品を増加し、それによつて物資不足の現象を益々激化せしめる等の事が行はれつゝある事、等々に顧みるならば此の事は一目瞭然である。此の點に資本主義的分業形態の進歩性の重要な限界の一があるのである。従つて資本主義を超越するものは斯くの如き不合理性を排除くものでなければならぬのでありその爲には結局經濟を全面的に計畫的統一的に運營するものでなければならぬのである。けれども斯くの如き、濟運營は正に經濟運營を計畫的に行ふものであるが故にその爲の巨大なる機關系統を必要としその活動の爲の巨大なる出費を必要とするのである。従つてもしそれが徒らに官僚化し煩文纏禮に悩ましむる如き事があるならばそれは決して資本主義を超越するものではあり得ないのである。

資本主義は如何にも封建武士的徒食階級を生産階級化したものではあるが、併し一方では勞働を私事とせる爲にその代償として得られるものとの個人主義的打算に基いて提供される程度の勞働しか動員し得ないのであり、生活を或程度保障されたる國民層を徒食者階級化してゐるのであり、他方では多くの勞働者を失業に苦しめしめてゐるのである。而も之等の事は資本主義の獨占段階への進出によつて愈々顯著になつてゐる。茲に資本主義の進歩性の限界がある。此の限界を越えんが爲には、勞務が單なる私事に非ざる事、従つてその提供がその代償として得られるものとの個人主義的打算のみによつて決定さるべきものに非ざる事、を徹底せしめ、社會的自覺に訴へて喜んで勞務に服せしめ得るが如きものでなければならぬと共に、經濟の計畫的運營によつて所謂失業を不必要ならしめるものでなければならぬのである。